

## 入社式1968年

吉田 真人

4月は入学式や入社式の季節である。コロナ禍での開催自粛から、今年は多くが復活したようだ。期待と不安が緋い交ぜとなった新人諸氏の様子がメディアで伝えられている。

大学までの何回もの入学式は、どれも殆ど記憶していないが、入社式は良く覚えてい。就職した会社の基幹工場が山口県岩国にあり、ここで入社式と集合教育が行われた。

3月末、友人の「出征万歳」の声に送られて東京駅をブルートレインで出発、翌朝車窓に瀬戸内海を見て岩国到着。一般社宅3DKの一室を割り当てられた。一応一人一部屋だ。食事と入浴はすぐ近くの本寮に行く。洗濯は全て(靴下も)やってくれる等なかなかの好待遇で、一安心。

4月1日入社式。学卒と院卒合せ約80名が入社、勿論知った顔はゼロ。

社長の訓示が始まった。この最中にやや大きな地震があり、室内が大きく揺れ、会場がざわついた。この時社長は慌てず工場設備の安全確認を指示、程なく確認が出来たとの報告があり、式は終了。図らずも製造企業の要諦を、入社初日に体験した訳だ。

2日目以降は集合教育。消防訓練や、深夜番の交替勤務一週間と並んで、この時代では先進的なフォートランのプログラム教育も一週間受けた。

夕方以降は、何人かと、ほぼ連日駅前の飲み屋街に出勤。小料理屋で瀬戸内の海の幸を満喫、おこぜやめばるの季節で、下宿暮らしの学生時代とは段違いの贅沢だ。その後はバーに出陣。おかげで、50日後に東京の本店勤務となった時には、赴任手当や各月の給料全てを使い果たしていた。

入社50年後の4月に同期有志と岩国を再訪した。工場見学に続き、社宅を訪問。バス・トイレ付個室の独立身寮を建設中で、新人獲得のために必須とのこと。

夕刻は50年前に通った小料理屋を訪問、2代目が腕を振るった魚料理は相変わらず新鮮で美味しい。が、すしはシャリが甘くて田舎風と感じた。

50年で時代も変化したと共に、当方もグルメ体験を積み増したということだろう。

2022年4月28日